

## 行政改革の思い出

宇野宗佑

滋賀県の政経文化パーティーは、大平総理にとって最後のものではなかっただけに、私にとっても印象深いものがある。当時、滋賀県には赤潮が発生し、県会では、そうした水質汚濁に対し富栄養化防止条例を制定したものだ。そのことに関し総理は同席の者にこういわれた。「富栄養という言葉、それはどの一字をとってみても貧しい頃の日本人には懂れの文字であり、言葉であった。それを現在は防止するというのだから随分せいたくになったものだね」。ここで私をふりむき「お互い、粗菜粗食で育ってきた。それでもこれだけの健康を与えられておる。この選挙が終わったら、一つ粗菜粗食主義を内閣の柱としようか、宇野君」。その時、総理は阿々大笑しつつ、自分の胸をドン、ドンと二度叩かれたものである。にもかかわらず、旬日を経ずして総理は入院された。

その五日ばかり後、私は滋賀県から伊東官房長官に電話をかけた。「知人の話によると、大平総理はこの五月アメリカを訪問されたが、それが暗剣殺の時だったそうだ。こういう話を貴君が信するか信じないかは別として、閣僚の一人としてこれを耳にした以上は黙過するわけにはいかない。私も知らなかったが、茅ヶ崎の寒川神社は方除けの神様であるという。速やかに、総理に全快してもらい、再び選挙の第一線に立つてもらわなくてはならないから、一つ秘書官でも派遣してお祈りをさせてはどうか……」。二、三日して閣議のため上京すると、官房長官はさっそく私にこういった。「仰せの通りその日のうちに秘書官が寒川神社にまいりましたよ」。こうして関東における方除けの神、寒川神社の御神符は、最後まで大平総理の枕頭に祀られていた。

こんな物語があっただけに、総理の逝去はまったく痛哭の極みであつた。私は当日遊説先の鳥取におり、午前六時総理急逝という内閣参事官の電話を受けた。もちろん急遽帰京したが、その間、私の脳裡を駆けめぐつたものは、やはり第二次大平内閣組閣の夜のことである。第二次大平内閣の最大使命は、財政再建と行政改革であつた。組閣本部に赴いた私に、総理はこういわれたものだ。「竹下さんと貴方が手を組んで、是非ともこの大仕事をやってもらいたい。そのため、他の閣僚は貴方達より若い人をつけておきました」と。今思つても、この陣立てがなかつたならば、とうてい行政改革はできなかつたであらう。機構の大きな運輸、農林、建設等はいずれも竹下蔵相と私の後輩の人たちが大臣なのだから存分にやつてほしいというのが、総理大臣の意向であつた。そして認証式の時、宮中の控え室においても、総理は私を招いて次の四項目を話された。一、特殊法人の整理。二、地方支分部局の整理。三、補助金の整理。四、認許可の整理。この四本柱で大平内閣の行革は出発した。

行政改革は、率直にいつてエンドレスである。だから、パーフェクトゲームはないのだ。たとえ特殊法人を十つぶしても、二十つぶせという声がその次の瞬間から起る。二十つぶしても三十つぶせた筈だという声がまた続いて起るだろう。そうしたなかで、それこそ電光石火、特殊法人十八、地方支分部局三十五、補助金千六百億円、認許可千五百といういずれも対象案件の一分から一分五分にあたる大整理に成功した。総理はそのつど、目を細めて喜ばれたものである。特殊法人は、一つつぶしても内閣が一つつぶれるといわれてきた。その至難の行政改革も、第二次大平内閣においては、組閣後一カ月ばかりであらかた片づけることができた。やはり総理大臣の大きな指導力があつたればこそ、それは、戦後最大の規模の成果をおさめえたものと信じている。

八カ月という僅かな期間ではあつたが、私はいま万感の思いをもつて、その当時のことを振り返つてゐる。偉大なる人、大平総理のご冥福を祈つてやまない所である。

(衆議院議員・第二次大平内閣行政管理庁長官)